
人喰らいの海辺

雪芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人喰らいの海辺

【Nコード】

N6848J

【作者名】

雪芳

【あらすじ】

普通の少女の日常は、ある夜を境に一変する。人喰い蟻に襲われた街で、彼女は生き残れるのか。サバイバル中編。

第一話「侵食」

「みなさん見てください。このように桜の根がアリによって噛まれています。県内では様々な怪現象が続いています。これは自然を汚してゆく人間たちへ向けられた警告なのでしょいか」

枯れた桜並木を歩いていたレポーターの眉間にある妙な皺が気になって、あたしはテレビのスイッチをきった。部屋の電気も消してベットに滑り込み、布団を引き寄せ丸くなる。

まったく、げんなりする。

「春になって虫が湧いてきただけじゃん、アホか」

朝昼晩の三日三晩、同じニュースばかりしゃべって、よくもまあ飽きないものだ。新鮮味を失った情報を、取り込んでいるこっちでさえ疲れてるってのに。

やれ地面に穴が開いたの、やれ桜が咲かないだの、やれ人類への警鐘だの、あたしなら三日も続けたら発狂しちゃうよ。

「ぼかぼか春風で脳みその感受性も衰えてんのかねえ」

平和すぎる穏やかな春の夜。

あくびを噛みしめながら、あたしは目を閉じた。

黒の上に白い膜が被さったような視界。朝からまばらに降っていた小雨が地面を叩いてる。そろそろ明日が今日になる頃かも。

……あれ、雨が強くなってきた。

何分経っただろうか。

ふかふかのベットに横たわって森の奥で横たわるお姫様のように

目を閉じているのに、肝心の眠りの世界はいつまでたっても降りてこない。

小雨は雨に、雨はいつの間にか大雨越えてどしゃ降りに変化して。冬に溜め込んでいた雨を吐き出しているみたい。

うるさい。どうしよ、ホントに眠れない。

眠れないと気づいた途端に余計眠れなくなるのが人間の性だ。あたしは少し焦りながら羊を数え始めた。

と、百番すぎの羊が五十番すぎの羊と駆け落ちした頃、あたしは体に違和感を覚えた。

むずがゆい。

まるで誰かに、触れるか触れないかの微妙なタッチで体をまさぐられているみたいだ。

目を開ける。

なにもない。けど鎖骨からゆっくりと、確かに、あたしの体をねぶる何かを感じてる。

あたしは指で何かを摘んだ。指先でじたばたと蠢く感覚。

虫？

どこから入ったんだか。ああ、ヤダヤダ。

「変態虫め。あたしの体を触っていいのは玉木宏レベルのイケメンだけだっ」

あたしはベット脇のライトに手をのばす。橙色の小さな明かりが部屋を曖昧に照らす。

瞬間、息をのんだ。

アリだ。

大量のアリが布団の上を這っている。

消しゴムのカスをまき散らしたかのように布団の上に点在するアリ。

チロチロとした足取りで右往左往するアリ。

あたしの指につままれジタバタと抵抗するのもまた、アリ。

息を飲みこんでからほぼ同時に、あたしは腹の底から奇声をあげた。

弾けるように立ち上がり布団をあおる。視線を走らせる。布団の下まで侵入してきたアリは殆どいない。

でも枕元にもチロチロという。壁にもいくつか這っている。

「なに、何なの!？」

アリがどこからきたのか。あたしは床に目をのぼし、その源を探した。探してすぐに、再び悲鳴をあげる。

アリは部屋にひとつしかない扉からわらわらと入ってきていた。

その量が、尋常じゃない。

ワンルームマンション。扉のむこうにはキッチンがある。そのキッチンシンクが詰まり、締め忘れた蛇口から吐き出される水を受け止められなかったとして、シンクから水が溢れてしまった。

……そうしたら、このようになるだろうか？

溢れた水が廊下を渡って、寝室まで流れてきたら。

ただしこれは水じゃなくてアリ。

気味の悪さがゾワリと喉までせりあがる。

冗談じゃない。つまり廊下はアリだらけってこと？

廊下、キッチン、玄関には遮るものがない。アリは玄関の、ポスト穴からこちらへと向かってきている、としたら。

ふいに、刺すような痛みが指先を襲った。

反射的に払う。指先からボトリと落ちたのはアリだった。あまりにも衝撃的な光景に、指から離すのを忘れていたアリ。そいつが、あたしの皮膚を強い力で噛んだのか。

だけどなんなの？ おかしい、普通じゃないよ。

あたしの指に、血が滲んでる。

傷が。

小さなハサミで切ってしまったかのような傷跡が。

頭が真っ白くなる。アリに噛まれて血を流すなんて、聞いたことがない。

聞いたことが……、いや。

記憶のフラッシュバック。

さっき観たテレビの内容。

「みなさん見てください。このように桜の根がアリによって噛まれています」

アナウンサーの声が脳みそに響き渡る。

アリに噛まれてボロボロになってしまった桜の根が、目の前で点滅した。

まさか、人間の体さえ噛めるのか。

アリが？

こんな小さいアリが？

目の前で、傷口からあふれ出した血が、ついに球体を保てずにたれ始めた。

体中の細胞という細胞が警鐘をガンガンと打ち鳴らす。

あたしは咽喉からこみ上げる恐怖と悲鳴を飲み込みながら周囲に目を配った。

アリは猛烈な勢いで扉の隙間という隙間から這い出し、闇よりも濃い黒染みとなって部屋を侵食していく。

アリに食われる――――。

映画のような絶望があたしに近づいてくる。ベットの足へ、シーツへ、あたしの体へ。

あたしは逃げ口を探した。

扉からアリがやってくる。ならば脱出できるのは窓しかない。

パニックによる眩暈を覚えながら、あたしはベット脇の窓枠へと手を伸ばした！

第一話「侵食」(後書き)

2007年ごろ作成。

第二話「逃避」

滝のような、雨だ。

あたしは激しい雨に無駄な抵抗をするハイパーを見つめながら、びしょ濡れの体をこすり合わせた。

「大丈夫？ 間一髪だったもんな」

あたしの隣、運転席でハンドルを握り締めながら、男……名前を鈴木さんというらしい、鈴木さんが呟いた。

鈴木さんの言うとおり、あたしは間一髪だった。

壁伝いにマンションを降りると、街は異常事態に混乱していた。

恐ろしい量のアリが街中をせわしく襲い、あたりは恐慌状態に陥った人々の悲鳴で満ち溢れていた。

地面を容赦なく叩きつける豪雨から逃れるためだろうか、地面から人々の家へと、アリは雪崩れ込んでいた。

アリに覆われた街。 今まで観たことも聞いたこともないような地獄の光景が四方八方に広がっていた。絶望と混乱の嘆きが至る所から溢れかえっていた。

あたしは目を見開き、耳を押さえながら、懸命に蟻のいない方へと逃げた。アリに襲われないようにと川のようになってしまった道をわざと選んだことがあたしの命を左右したらしい。

あたしは今、安全な場所にいる。偶然通った車に拾われなかったら、今頃は。

そう思って、心の底から身震いする。

「本当に助かりました。ありがとうございます」

「いや、気にしないでくれ」 鈴木さんは淡々と車を運転する。車は獣道を走っていた。

走ってさえいれば、アリに襲われることはないだろう。

「あの、すみませんが、どうしてこうなっちゃったか分かりますか？」

あたしは恐る恐る鈴木さんに尋ねた。

悪夢が具現化したような非常事態。何の前触れもなかった、はずだ。

あたしが寝ている間に世界は丸ごとすり替わってしまったんだろうか。

あたしの質問に鈴木さんは少し考え込むと、重たそうに唇を開き始めた。

「信じてもらえないかも知れないけれど、いいか？」

言葉の意味がよく分からない。この人も今起こっている事態に頭がついていないのだろうか。

疑問を喉元に引っ掛けながら、あたしは頷いた。

「ラーセン棚氷って知ってる？」

「……えっと、知らないです」

突然放たれた耳慣れない単語に、あたしは素直に答える。

「地球温暖化の影響で世界中の気温が上昇しているのは知っているよね？」

「学校で、えっと今あたし大学に通ってるんですけど、ちょっと習いました」

「そう。ラーセン棚氷っていうのは南極にあるんだけど、それが最

近解け始めたんだ」

それとアリにどんな関係があるんだ？

「ラーセン棚氷はある海域を覆っていた。それが解けたことで、ある異変が海に起こったんだ」

「異変、ですか？」

「ああ。海域に封じ込められていた生き物たちが出現し始めたんだ。彼らは独自の進化を遂げていて、非常に奇怪な生態をしていた。一つ目の巨大イカだとか、海亀より大きい団子虫みたいな生き物とかね」

想像しようとして、いまいちうまく出来なかった。あたしの頭のキャパシティーを超えてる。

「もしかして、その、海の生き物が日本に来たんですか？ あのアリは海から来たんですか？」

「違うよ」

鈴木さんは冷静に否定すると、言葉を続けた。

「同じような現象が日本の、地下で起こってるんだ。ここ数年、少しずつ地中にあった氷の層が地球温暖化によって溶けていった。更に、いきすぎた都市開発によって地盤沈下が起こり、地中へ続く深い大穴ができた。それらがきっかけになり、それまで氷に包まれた閉塞的な環境で独自の進化を遂げていたアリたちが地上に出現し始めたんだ」

ギアをチェンジして、鈴木さんは更にアクセルを踏んだ。

「信じなくても良いよ。誰も信じなかったから、こうなったんだ」
まるで何もかも知っていたかのような口ぶり。

「鈴木さんは何者、なんですか？」

「さっきも話したとおり。製薬会社のただのサラリーマンさ。……殺虫剤の研究をした」

雨に濡れた斜面を、車が勢いよく登る。

坂道を登りきったところで、車は停車した。

豪雨が鉄を叩く音、それを切り裂くようにせわしく動くワイパー。暗いフロントガラスに、険しい鈴木さんの顔が映る。

二十台半ばのごく普通の男性と、ごく普通の女子大生のあたし。アリの襲撃がウソだったかのようにごく普通の、なんだか自主映画の一場面みたい。

別れ話を切り出すように、鈴木さんは再び重たそうに唇を動かした。

「アリはずっとこの日を待っていたよ。無知で傲慢な人間たちの欲望が、自分たちを閉じこめる水を溶かす日をね。アリにとっての春が、始まりの季節が、ついに来てしまったのさ」

世間話のようにそう言うと、

「さて……、君にはここで降りて欲しいんだけど」

鈴木さんは外をみやった。

「降りるって、外はアリで溢れてるんですよ！」

冗談じゃない。あたしはシートにしがみついた。

「この先に市民プールがある。アリは水の中までには入ってこられない。そこにしばらく浸っていれば大丈夫だ」

「そんなの、安全かどうか分からないし！」

「今から俺が行くところよりは安全だと思うよ」

鈴木さんはあたしを安心させたいのかぎこちなく笑みを浮かべる。ただどあたしは笑顔を睨んで跳ね返した。あたしの真剣な表情に、鈴木さんの笑みが翳る。

「言わないでおうと思ったけど……あのアリはただ異常繁殖してるってだけのアリじゃない。肉食のアリなんだ。モグラ程度なら、ものの数分で骨だけになる」

やっぱり。

街中からあがっていたあの悲鳴は、断末魔だったのだ。

なおさら、ここで引き下がるわけにはいかないじゃないか。

「お願いします。つれてって。いったい何日プールに浸かっていれ
ばいいのか、鈴木さんも分からないでしょ？」

あたしは懇願し、シートの上で土下座した。

鈴木さんの表情は分からないけど、苛立ちの含まれた声が下りてきた。

「危険かもしれないんだ。それでもついてくるのか？」

その言葉にドキツとする。

だけど、市民プールにひたすら浸かり続けるよりも、知識と情報を持った大人の男性についていった方が安全だと、あたしの心の天秤はそう判断していた。

あくまで直感。

でもその直感を信じたから、あたしは窓から逃げる事が出来たのだ。

鈴木さんについていく。その方が、生き延びる確率は高い……と思う。

ひたすら頭を下げ続けるあたしに、ついに鈴木さんは観念した。「分かった。もう時間がないから行くよ。後悔しても知らないよ」

「……お願いします」

頭上から、鈴木さんのため息がこぼれた。

「シートベルトをして。飛ばすよ」

鈴木さんはそういうと、再びエンジンを燃やした。

第三話「行動」

鈴木さんが向かっているのは、勤め先の製薬会社だった。どうやらそこに今回発生したアリの資料があり、鈴木さんはその資料を、急遽設置されたらしい災害対策本部とやらに送らなければならないという。

鈴木さんの瞳は使命感に燃えていた。誰も信じなかったからこそうなったんだと鈴木さんはさっき言っていたけれど、もしかして後悔のようなものがあるのかもしれない。

製薬会社はちょっとした国立大学並みに広い敷地を持っていた。緑に包まれた広大な敷地内に、近代的な建物が並んでいる。製薬会社というのは、そんなにお金になるものなのだろうか。

「さ、そろそろ出るよ。後ろにサンダルがあるはずだから、それ履いて。殺虫スプレーも念のために持っていていいから」

駐車場に停車する。

鈴木さんが周囲を懐中電灯で照らし、アリのいるかを確認する。

春の雨にやむ気配はない。激しい雨によって水浸しになったアスファルトの上にはアリは這っていないようだ。

「よし行こう」

鈴木さんに促されて、あたしは恐々としながらドアを開けた。

「急ぐんだ」

殺虫スプレーというイマイチ頼りない武器を片手に、あたしたちは叩きつける雫を切って建物に向かった。

中はシンと静まっていた。

そういえば車の時計は三時をさしていたし、さすがにこの時間まで残業をしている人はいないんだろう。

リノリウムばりの白い廊下にポツポツ灯るのは非常口を指し示す緑の光だけ。

「アリはまだ来てないみたいです」

あたしは衣服がびしょびしょになっているのもかまわず鈴木さんの腕を握った。恥ずかしいよりも置いていかれるかもしれない恐怖の方が大事だ。

「油断はしない方がいい。確かにアリが出てきた地盤沈下地域からは遠いけど、距離は街と変わらないんだしね」

濡れているせいで滑りそうになる足をなんとか前へ前へと進める。

「でも、アリって道しるべフェロモンっていうのがあるんですよ」
鈴木さんに歩調をあわせて。

「よく知ってるね」

「国語の教科書に載ってたんです、小学生の頃の。お尻からフェロモンを出すから、餌まで行列を作るって。だから道にも迷わないで餌まで一直線で。」

……でもここには餌みたいなものないし、と言ったところで、あたしの声は自然にしぼんでいった。

つまりあたしは、街が餌場だからここは大丈夫に違いない、と言いかせようとしているのだ。鈴木さんと自分に。

だけどそれはあたしが餌だったかもしれないということを意味してる。そしてあたしの大学の友達やバイト先の人だって……。

自分の発言に怒りと後悔を覚える。

最低だ、あたし。鈴木さんだって、街に家族や知り合いがいるに違いない。

あたしは鈴木さんを見上げた。

鈴木さんの横顔はどこか冷たい。軽率なあたしの発言に、機嫌を悪くしたのかもしれない。

うまく心情をくみ取れないまま、更に歩を進める。

「もうちょつとで資料室だ。資料室の中は完全に隔離されているから安心していい」

鈴木さんは地下へと伸びた階段をライトで照らしながらあたしに微笑んだ。

こんな時でも人に、しかも気の利かないことばかり言ってしまうあたしに、氣遣える鈴木さんの大らかさに胸が少しだけ痛み、同時に軽くなる。

あたしもぎこちないながら笑顔で返す。

そのまま、ふわつとした足取りで、あたしは階段の一段目を踏みおろした。

と、そのとき、予想していた堅い感覚とは逆のものが、あたしの体を掬った。思わずバランスを崩したところを鈴木さんにサッと抱えられる。

ああ、あたしって本当に役にたたないな。

照れながらも感謝の言葉をつむごうとして、
……あたしの思考は停止した。

あたしの足に無数のアリがたかっている。叫びながらあたしは殺虫スプレーを足に噴射した。

更にバランスを崩して、ついにあたしたちは床に尻餅をついた。そして目の前の恐るべき光景を、見てしまった――。

目が合った。

最初は、黒い影かと思った。その影は巨大な黒い芋虫のよう。そしてちょうど顔があるあたりに、影や芋虫にはあるはずのない目玉があった。

赤く充血した目玉が、ぬるぬるとした光を反射させながら、こちらを凝視している。

生き物だ、と思った瞬間、鈴木さんが物体へと殺虫スプレーを噴射した。粉塵に振り払われるようにアリたちが床へ落ちる。

確信したくはなかったが、ソレはなんと人間だった。

血まみれの眼鏡が階段の脇に落ちている。

鈴木さんが、高坂、と小さく吐いた。

高坂と呼ばれた男性はぐったりと恨めしそうにこちらを見つめている。そしてその皮膚はまるで焼け爛れたように浅黒く、所々から血液が流れていた。

生きたまま殺されたのだ、と解るのに時間はかからなかった。

目蓋や唇、鼻といった突出した部位は犬にでも喰いちぎられたようにあからさまになくなっており、指先は腐り落ちてしまったかの

ように骨と爪だけを残している。

衣服はただの布切れとなって血に染まり、はだけた胸元には白い肋骨が浮いている、というか、飛び出ている。

人間だ、人間だ。

アリに喰われた人間だ。

呆然としながらそれを認めたとき、吐き気が一気に襲った。

見ないように目を瞑っても、生肉の脂っこい臭いが鼻腔に漂ってきて、とめられなくなつて、二度、三度と吐いてしまう。

そんなあたしの様子に気づいたのか、鈴木さんがあたしを強く抱きしめた。

背中をさすってくれる。

「大丈夫だ、アリに襲われて、地下に逃げようとしたんだ。そう、大丈夫だ、先に進もう」

先に進むという言葉に思わず耳を疑う。

車に戻った方が安全じゃないの、そう苛立ちながらあたしは鈴木さんに目を向けた。

……鈴木さんはあの、使命感に燃えた横顔で、じいっと地下を見つめていた。

命を削ってでも進もうと意気込む瞳。

真剣というよりも魅了されているような頬。

鈴木さんを仰視した瞬間、黒いインクがぼとりと落ちたかのように、心が小さな波紋をたてた。インクはみるみるうちにその根を広げる。

極めて直感的に、そう、直感的に、あたしは思う。

この人は、なにか、おかしい。

心のどこかが小さく警鐘を奏でてる。

そう感じながらも、あたしはついていくしかない。万が一ここから逃げ出しても、アリに襲われてしまっただけなのだから。

あたしは黒を払拭するように心の中で呟いた。

大丈夫だ、きっと。

この状態で精神的に変にならない方がおかしいもん。

大丈夫、大丈夫だ。

いつ倒れてもおかしくないくらいに磨耗した心を背負って、あたしたちはひたすら進んだ。慎重に、慎重に足を運ぶ。

地下は迷路のようで、鈴木さんがいなければ迷ってしまうだろう、と思う。

心臓が熱くてたまらない、体のありとあらゆる部分から冷や汗が出てるのがわかる、寒さではなく全身が震える。

キリキリと痛いくらいに恐怖を体現しながら長い時間を歩む。

そうしてようやく、資料室についたらしい。

「ここだ」

と、殺虫スプレーを構えながら鈴木さんは言った。

それは、レントゲン室を彷彿させる頑丈な鉄の扉だった。番号ボタンがドアノブの上についている。鈴木さんは慣れた手つきでボタンを押していく。

暗証番号制なのか、ずいぶんと長くボタンを打ち込むと、ようやくドアの向こうから鍵を開けるような音が軋んだ。

鈴木さんはドアノブに手をかけると、ゆっくりと扉を開け始めた。中からアリが出てこないことを確認し、一気に引く。

と、小さな部屋のような場所が広がった。アリはいない。

部屋の奥にもうひとつ扉があった。扉は二重のようだ。

廊下につながる扉を閉めて、鈴木さんは再びドアノブに手をかける。同じような動作で慎重に中を確認してから、ゆっくりと扉は開かれた。

尾をのばす、心の黒いシミを残しながら。

第四話「豹変」

資料室は、あたしの想像とはちがう姿をしていた。
図書館のような形をしているんだろうなと思っていたけれどそうではなかった。

どちらかというと理科室みたいだ。虫や化学分子の模型が並んでいて、大きいコンピューターが数台設置されていて、あたしの頭の中にあった

「資料」という言葉とはだいぶ離れている。

人が入ったのを察知したのか、パッと明かりが灯った。

床に目を配ってアリがいるか確認する。

いない。

いないことが確認できると、あたしはようやく力を抜いた。すうと憑き物でも落ちたみたいに恐怖が昇華する。

「資料室っぽくないですね。今はパソコンが管理する時代、ってやつなんですか？」

安心して、なんとも気の抜けた台詞が出てしまう。鈴木さんは聞こえなかったかのように淡々とコンピューターの電源を入れた。

あたしはぼうっと鈴木さんの背中を見つめる。

休もう。

机に腰掛けると、今度は恐怖の代わりに不思議さが湧いてきた。

街から絶え間なく上がっていた悲鳴と、先ほど見た凄惨な男性の姿、寒さを感じ始めたびしょ濡れの体。

それらに比べて、資料室は驚くほど平和だ。システムの強固さ、

なにより鈴木さんの様子をみる限り、安全は絶対的に確証できるだろう。

平和すぎて、むしろあたしが体现した事実の方が夢のようだ。

酷すぎる、悪夢。

あの中に、あたしの日常の全てがあったのだ。

頭の中に次々とみんなの顔が浮かぶ。家族、は、離れた場所にいる。きっと安全だろう。問題なのは……。

友達の顔。

教授の顔。

バイト先の人の顔。街で出会った人の顔が浮かぶ。

遠い北海道を離れて不安一色だったあたしを迎えてくれた優しい顔。

嫌なこともあったけど、楽しくないと思ったことはなかった。

特に親しい友達の名前が自然と唇から溢れてくる。

一人だけ安全な場所に来てしまった。

あたしは最低だ。携帯でも持ってくれば良かった。

パジャマ一枚、これじゃ誰とも連絡取れないじゃん。

みるみるうちに思い浮かべた人たちに黒が浸食する。黒が彼らを完全に塗りつぶすと、次にあの死体が現れた。

男だったのか女だったのかさえ判らなくなった、剥き出しの肉体。破壊されつくした皮膚に、赤茶色い菌と、濁った目玉がクツキリとそこにある。

それは、どうしてあなただけ生きているの、と言っているみたいだ。

こみ上げる吐き気と苛立ち、涙。
荒れた海のように悲しみがさざ波をたて、全身が打ちひしがれて
痺れる。

あたしだけ逃げてしまった、あたしだけ。あたしだけ。

氾濫する感情に溺れかけながら、あたしは自分の体を掻き抱いた。

と、その時だ。

振り下ろそうとして意外な事態に体が停止してしまった。

最初はなんなのかわからなかった。

静かな部屋に不釣り合いな音が耳に入り込んできて、あたしは周
囲を見渡した。

鈴木さんだった。

鈴木さんが地鳴りのような叫び声をあげてる。いやちがう、体を
そりあげて腹の底から笑っている。

「す、鈴木さん？」

鈴木さんは息もできないくらいに狂った笑いをあげながら、あた
しを制するように片手をあげた。

「ふっ、ふふふっ……あはっ」

「なにがそんなにおかしいんです？」

あたしはあたしの質問の意味さえ分らない。だって外はアリに
よって大パニックが起きているんだ。笑う要素なんてひとつもない
んだから。

「おか、なんでおかしい、かって？」

喘えぐように息を吸い、あたしを射る彼の視線はゾツとするほど黒目が大きい。

鈴木さんは吐き出すように言葉を床にぶちまけた。

「ざまーみろッ！ 俺の研究をバカにしやがって！」

耳を疑う。なに？ なにを言ってるの？

「地下には人喰いアリがいたんだ。信じないバカどもはみんな死んだ！ 高坂をみたか？ 肉団子！ 人間肉団子だ！ 俺をバカにした報いだ！」

バカにされたから？ 信じてもらえなかったから笑ってるの？
なにを言ってるの？

「そんな、笑ってる場合じゃあ」

「大丈夫だって」

あたしを遮って鈴木さんは喋り続ける。

まるで自分の自慢話に酔った子供のように。

「朝には俺の薬が出回って世界を救うさ。人喰いアリには鈴木 of 殺虫剤をどうぞってな。あのアリには通常の殺虫剤は効かない。みんな俺の薬に頼り、群がるしかない、アリのようにね。……俺は大金持ちさ」

再び、嫌な予感がフツフツとあたしの中で存在を誇示する。

そういえば鈴木さんはやけに冷静だった。安全なルートを知っていた。一人で街を出ようと車を飛ばしていた。あたしは偶然通りかかって。

時折、鈴木さんは笑っていて……。

「鈴木さん、アリが出てくるの、知ってたんですか」

「うん」

悪びれなく鈴木さんが微笑む。

「アリが出てくる場所も知ってましたよね」

「そうだね、それがどうかしたの？」

あたしは後ずさった。さっきから鈴木さんに感じていた違和感がカチカチとひとつの答えを形作っていく。

「アリを地上に出したの、鈴木さんじゃないですか？」

鈴木さんは全く表情を変えずに言い切った。

「ご名答！」

次の瞬間、あたしは平衡感覚を失った。なにが起こったか、首に圧迫感がある。

目を開くと、耳元でカチリと何かが音をたてた。視線を移動させる。

拳銃。拳銃だ。羽交い締めになされて、拳銃をこめかみに当てられてるの？

「君は運が悪いよね。せっかくプールの場所を教えてあげたのにさ、意地になってついて来て。挙げ句にアリの話をしてさ、思わず地盤沈下位置の話しちゃったもんなあ」

後頭部に鈴木さんの吐息がかかりゾワリと鳥肌がたつ。心臓の音が指先まであたしを振動させる。

過呼吸。

「お陰で俺は殺人もしなきゃいけなくなっちゃった。でもいいよね、アリに喰われるよりは」

ボロボロと涙がこぼれる。ただただ立ち尽くす。

耳元で、拳銃がカチリと、冷たい音をたてる。

あたしは目を閉じると、大きく息を吸い込み、……そして。

エンディングA「運命」

再び、吐き気をおぼえた。

地下へ来る途中で死体を見てからというもの、何度か胃からせり上がるような感覚がある。

なにも今、殺されるかもしれないっていう時に……。

あたしは目をつむって、吐き気をこらえながら苦笑した。銃口を向けられた状態で、意外と冷静だ。体は震えるし涙は出るし呼吸も早い。けど混乱してない。変なの。あたしは諦めちゃったのかな。

またせり上がってきた。飲み込む。

「なんだ、殺されるっていうのに随分と大人しいね」

鈴木さん……、鈴木がやけに楽しそうに囁いた。驚くことに銃口の冷たい感触が離れてゆく。なんの気まぐれだろうか。

「大人しい子は嫌いじゃないよ」

鈴木の気配が背後から消える。彼はあたしの顔をのぞき込むようにヌツと視界に現れた。

吐き気を飲み込むあたしに銃をつきつけながら、鈴木はモゴモゴと唇を動かす。なにを言っているか分からない。

だた人形のように立ち尽くしていると、ふいに鈴木があたしの腹を蹴りあげた。

吹き飛ばされるように、あたしは机の上に背中をぶつける。

さほど痛みはないが、喉まで吐き気の固まりがせり上がった。飲み込んで胃に押し込む。唾液が滝のようにでてくる。

……ああやっぱりあたし、殺される。

拳銃をつきつけられているのに、いつの間にかヒドく冷静なあたしがいる。冷静というか、感慨がわからないのだ。

達観してるの？ 悟っているの？ わかんない。だけど、すごく。

体中の毛穴という毛穴から汗をだし、口の中も妙に潤んでる。涙も止まらない。なのに感情は酸性の湖のように静か。

あたしは小さな咳払いも唇で封じて、ニタニタと笑う鈴木を見上げる。あの目だ。車を運転していたときの、死体を観たときの、とり憑かれたような瞳。

あたしは糸の切れた操り人形か麻酔を打たれた研究動物のよう。だらりと机の上にしなだれるだけ。鈴木はそれを、ハンドルか死体でも見てるように、立ってるだけ。

ばかみたい。こんなに逃げ回って、結局こんなにかよ。

「何を笑ってるんだ？」

「知らない」

無意識に唇をあげてたみたいだ。そう思うと、吐き気と笑みと、それが結合して湧いてきた。

ふははは、ふははは……。

なんだあ、あたしも、こわれてたかあ。

もう、吐いちゃえ。

あたしは勢いに任せて床に胃の中のものを全てぶちまけた。全て楽になるんだと、思いつき吐き出した。目蓋を閉じて、力を入れて、胃からせりあがる何かを、ありとあらゆるものを、一気に吐き出す。

吐き出したかったものは恐ろしく大量に胃から咽喉へ、そして外へ床へと放たれていく。
留め止めがない。

とまらない吐き気に疑問がわいて、あたしは吐きながらゆっくりと瞳をあけた。

あれ？

何故だか、この部屋にいるはずのないアリが、大量に床の上に這っていた。目を凝らさなければありだと解らないくらいに小さなアリだ。

あたしが吐き出したものから散らばるように、機械的な動きで、アリたちが広がっていく。

何が起こっているのだろう。そう、疑問を頭に展開しようとした瞬間、爆裂音が鼓膜を叩きつけた。同時に衝撃が走り、あたしは床の上に転んだ。

鈴木が発砲した。何に？ あたしに？

くらくらの意識の不安定な頭。ゆり動いて、あたしは腹を見る。あたしは血をながしてる。

うたれました。

「近づくな」

あたしに銃をむけている鈴木、真っ青な顔で、おかしいっとならない。近づくなと言われたけれど、あたしは近づく。

再びの発砲。また吹き飛ぶ、今度は腕をやられたらしい。でも痛くないです。あいかわらずの吐き気。両手に吐き出す。なんて、黒いんだろ。

黒、黒。

「あたし、ありを、吐いてるの？」

うたれました。

また転がる。あたしは吹き飛ぶ。横たわる。

狭いっただらありやしない、あたしの視界。その視界の手前で、床にのびる腕。骨を失ったようにしなだれる手。指先の傷口。アリに噛まれた傷口。

そういえば、アリはなんで桜の根を食べてたの？ 肉食だったんでしょう。

桜の根の下に大地があったからよ。おうちがあったからよ。

「ぽかぽか春風で脳みその感受性も衰えてんのかねえ」

黒、黒、黒。

そういえば、どうして直感を信じて鈴木についてきたの？ 市民

プールは安全なんでしょう。

人間にとっては安全でしょう。あたしにとっては違うのよ。

「危険かもしれないんだ。それでもついてくるのか？」

黒、黒、黒、黒、黒。

「でも、アリって道しるべフェロモンっていうのがあるんですよ」
だから、餌まで一直せんなんでしょう。どうしてあたしはくわれなかったの？

そうよ、だから地下に行くのよ。あの人も地下へ向かってたですよ。

「そう、大丈夫だ、先に進もう」

そうね。だったら、どうなの。

黒、黒、黒、黒、黒、黒。

あたしは痛みもなくやってくるやみをうけとめながら
すずきの背中をみる。

あたし、さいしょから殺されてた

さいごに一つだけききたいわ。
なあに。

[illegible]

あたし、

黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒
黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒
黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒
黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒

黒黒黒
黒

黒

おいしかった？

エンディングB「抵抗」

あたしは不意に、金属音を聞いた。

二重になっている資料室のドアが開かれる音だ。そう理解して、あたしはパッと瞼を開いた。

ちょうどあたしは扉に対峙するような体勢をしていて、だからこそ扉が開いていることがすぐに分かった。

予想だにしていなかったのだろう、耳元で小さく彼がつぶやく。

「なんなんだ……」

と同時に、首の圧迫が消え去った。あたしは思わずせき込み、床にひざをつく。

「おい、お前……見てこい」

彼は、——鈴木は、あいも変わらずあたしに銃口を向けている。

けど、その顔は恐怖によってひきつっていた。

理由はわかった。

ドアは蟻には開けられない。半開きではあるけれど、開けられるのは人間くらいだ。つまり、彼は何者かが入るのをみた。そういうことだ。

でもなんで、そんなに怯えているのだろう。銃を持つ人間より怖いものがこの世にあるもんか。

「早くしろ！」

鈴木 of 罵声が飛んで、あたしは意を決した。なんでもいい。銃で打たれるよりはマシだ。

あたしは駆け足で扉に向かい、一気に開いた。飛び込む。

……けれどあたし、床に転がるだけだった。

人もなにもいなくて、当然アリンこ一匹いない。拍子抜けしつつ隅々を見渡すも、やはり何もいない。

「ゆ、幽霊？」

酷く間の抜けた声が出た瞬間、背後から銃声が鳴り響いた。

反射的に背を丸める。銃声は二度、三度と続いた。弾が切れたのか、カチカチという音と共に、今度は床が振動した。資料室のありとあらゆるものが床に落ちて壊れるような破壊音、そして鈴木が何かにあらがっているような声が聞こえ——、悲鳴があがった！

体の中にある全ての声をぶちまけたような叫び。それがあたりに散らばり、資料室に反響する。

まるでなにかと格闘しているみたいだ。

再び、銃声！

あたしは突然の事態を震えながら耐えた。永遠に続くかと思ったけれど、次第に音は小さくなり、やがて嵐が過ぎ去ったように静まりかえった。

……沈黙の後もうずくまり、静けさに耳鳴りと孤独を感じた頃、あたしは恐る恐る資料室を覗いた。

横目にみた中は、大地震にでも襲われたように全てが床に転がり、散乱し、破壊されていた。

じわじわとあたしは扉を開ける。少しずつ鉄の扉が移動し、視界が開けていく。

鈴木が床に横たわっている。

そして赤い何か彼の上に覆い被さっている。

瞬間、考えるよりも先にあたしは資料室に入り、鈴木のもとへと

駆け寄った。

鈴木の眉間には、ぽっかりと穴が開いていた。そこを中心として、赤い血だまりが羽を広げている。死んでいることは一発で分かった。

なるべくそれを見ないように、あたしは鈴木に覆い被さる“彼”に近寄り、叫んだ。

「こっ、こっ、高坂さん！」

高坂さん。階段の上でアリに襲われ、絶命していたかに思えた彼は、実は生きていたのだ。

あたしに気づいて、高坂さんが痺れるように動く。そして痛みに耐えながらも、あたしに視線を向けた。

食いちぎられて瞼はない。目玉を動かしてくれた。頬も唇もない。皮膚もない、肌がむき出しで。血塗れで。

鈴木に復讐しに来たんだろうか。それとも鈴木を止めに来たんだろうか。それとも。

「ありがとうございました……」

あたしの唇から、ごく自然にこぼれたのは感謝の言葉だった。高坂さんはそれを見て、再び痺れるように動いた。

食われた唇の根本が揺れる。標本のような歯が揺れて、喉の奥から呻きが吹き出す。しゃべっているのだ。

だけどあたしには高坂さんが何を伝えたがっているのか分からない。

自分の声が人間としての声をなしていないことを高坂さん自身も気づいたのか、今度は指を動かし始めた。

ところどころ骨の見える指。中には骨に肉が付いているとしか思えない指さえある。それを懸命に、高坂さんは動かす。

嗚咽したい熱い感情を無理矢理飲み込んで、あたしはそれを凝視した。酷い光景に鼻の曲がりそうな臭い、それでも不思議と吐き気はわからないのは、彼の必死さが震えるほど伝わるからだ。

彼は少しずつ、少しずつ、床になにかを綴り始めた。

あい

ケ

く。3

「あり…か…く……る……、ア리가来る!？」

高坂さんが頷き、何かを付け足す。

に
け
ろ

あたしは反射的に立ち上がった。高坂さんがじっとこちらを見つめている。

道しるベフェロモン。

高坂さんの体は、ア리를餌へと導くフェロモンで覆われている。自分をめがけてア리가やってくる。それを伝えたがっているのだ。

血の池となった床。散らばった肉片。血と脂でつづられたメッセー
ー
ジ。

高坂さんの目が、虚ろに震え始めた。死期が近づいている。数分後か、それとも数十秒後か。

最後の力を振り絞り、高坂さんは鈴木を殺した。そしてあたしに生きる道しるべを刻んだ。

あたしは、あたしは。

目を背けていた鈴木之死体をまさぐり、あたしは車の鍵を探した。ポケットからそれをまさぐり、握りしめる。ライトに殺虫スプレーも二缶、手に持った。

きびすを返す。

あたしは血塗れの二人に背中を向けると、資料室を飛び出した。

薄暗く狭い廊下をひた走る。わずかな明かりと記憶を頼りにあたしは地上を目指した。

階段が目にとまる。一気に駆けあがる。高坂さんが倒れていた場所まで足をのばそうとして、とめる。

アリだ。アリが床を蠢く、乾いた耳が鼓膜をすり抜けた。

一步下がり、あたしはライトをかざす。悲鳴が喉をついた。高坂さんが倒れていた場所が、アリの群で黒く埋もれている。

逃げてきた高坂さんを追ってきたのだろう。地上へと続く階段はびっしりと小さな悪魔に染められていた。そいつらはとめどめのない水のように下へ下へと歩を進めていく。

あたしは階段を上ることを諦め、引き返した。走りながら地上への探す。幸運にも非常口があるらしいことを、廊下の淡い蛍光塗料が教えてくれる。

早く、早く早く。

儚い蛍火のようなそれが指し示す場所へと、あたしは床を蹴り、ひたすら走る。

早く、早く早く、早く！

——突然、目の前に濃紺が開けた。

あたしの喉を、地下の湿っぽい空気ではなく、爽やかな風が吹き抜け、肺がキュッと締まる。外に出たと理解するのに、あたしは少しの時間を要した。

まだ暗い早朝であったものの、外は平和そのものだった。雨はやみ、雲はあたりにちぎれてしまっている。

あたしは駐車場のちょうど裏側に出たらしく、遠くに鈴木の手がみえてとれた。

「助かった」

ホッとしたのもつかの間、不意に痛みが走った。針で刺したような独特の痛み、デジャヴを感じる。

目を落として痛みの場所を確認する。サンダルから覗いた親指に一匹、噛みついていていた。

殺虫スプレーを噴射する。アリのこぼれ落ちた。まだ上ってくる。更に噴射する。

あたしはバカをした。アリは駐車場のアスファルトに紛れて、大量に蠢いていた。確認を怠ったことを後悔してももう遅い。

泣き叫び、噴射し、助けを呼び、よろめき、車へと逃げる。どこもかしこもアリだらけ。

針のような痛みが、足の指、甲、くるぶしへと広がってゆく。痒い。痛い。助けて。だれか助けて。

ついにあたしの胸元まで、アリが浸食し始めた。もう遅い。なにもかも遅すぎた……。

あたしは膝をつき、アスファルトに倒れ込んだ。

死にたくない。死にたくない。

羊を数えるようにそれだけ心で念じた。何度も、何度も。
生きたい。

……。

……………。

乾いた音だけ、静けさの中、あたしは痛みが全身を襲い、覆い、あたしのすべてとなってしまうのを待った。それなのに、いつまで経っても“その瞬間”が来ない。

どういうことだろう。あたしはショック死でもしてしまったんだろうか。

薄目を開けて、現状を伺う。そしてその瞬間、あたしの運命は決まった。

アリたちがみな、電気に打たれたかのように震え、あたしの体からこぼれ落ちていた。信じられずあたしは、ゆっくりと大地に手のひらをつけて体を起こし、360度を見渡した。

あたしの視界に入る全てのアリたちが、神経でもぶち壊れてしまったかのように体を痙攣させている。

意味が分からない、けどあたしは生きている。

頬にジンと暖かさを感じた。首を傾げると、眩しい。

山の稜線の向こうから、光の矢がひとすじ、あたしに向けて放たれていた。朝になったのだ。

……朝、そうか。

「アリは、太陽の光に弱かったんだ」

立ち上がり、車へと近づく。あたしの閃きを後押しするように、光が全く当たっていない車の隅、闇の部分のアリたちはまだ威勢よく右往左往していた。殺虫スプレーをかけると、やはりそれも力なく粉のようにこぼれた。

車のドアを開けて鍵を使い、エンジンをかける。車はなんなく応えてくれた。走れると。

ハンドルを握りしめ、あたしはもう一度、朝日の灯り始めた世界を見渡した。アリで埋もれた世界は黒く、どこまでも続いている。

夜の闇の中、確かに彼らは最強の生物だった。世界は餌の蔓延る楽園だったに違いない。

だけれど光の射し込む今、ここはあたしたちの場所だ。

ギアを変える。ザラザラという感触はあるものの、スピードは出せそうだ。あたしは走りだせる。

「おいしいだけじゃ、ないんだから……」
あたしは眩き、アクセルを踏み込んだ。

エンディングC「人喰らいの海辺」

首を掴まれながらも、銃の存在に朦朧としながらも、あたしは彼を睨みつけた。

……鈴木さん。いいや、鈴木。

この人が、この人が、あたしの街を壊したんだ。
この人が。

無意識だった。次の瞬間、あたしは手に持っていた殺虫スプレーを構えると、鈴木の目に向けて一気に噴射した！

抵抗されるとは思ってもいなかったのだろう、鈴木はあたしの頭に向けて発砲するも――かすった。

耳の端を噛まれながらも、あたしは鈴木を蹴り上げて銃弾を回避した。

懸命に走り、机の裏に滑り込む。

銃弾が足元を横切る。机に穴があく。

強烈な叫び声をあげながら、鈴木は無差別に発砲し始めた。あたしは体を可能な限り小さく丸めて、銃弾から必死に逃げる。

と、五発も撃たずに鈴木 of 攻撃が終わった。弾が切れたらしい。あつけない彼の攻撃の後に、呻きと引き金の音がむなしく響く。

あたしは背中を丸めたまま机の端から鈴木の様子を見やった。

鈴木は天空へと空砲を放っている。そしてついに諦めたのか、乱雑に銃を投げ捨てると、机にすがりついた。

「目が、目があっ！」

鈴木は机に付属された水道の蛇口を捻り、必死で目を洗う。シンクに頭を突っ込みながら充血した目玉を洗う哀れなその後姿を、あたしは呆然と見つめた。

こんな情けない、こんな下らない男にあたしの日常が奪われただなんて。悲しみも憎たらしさも絶望もこえて、あたしは嗚咽を繰り返した。そして鈴木を蹴った。何度も、何度も。

どれくらい鈴木を蹴ったろうか。蹴っているうちに増長した虚しさによって、あたしは這って逃げる鈴木の後を追うのをやめた。

「あんたなんか、アリに食われちゃえばいいんだ」

壁の隅っこで蹲り涙を流す鈴木に、あたしは吐き捨てるように言う、目を瞑った。

今日はもう眠れない、羊だって数えないけど、きっと大丈夫だ。鈴木が葉が出回れば、アリたちはきっと殲滅されるだろう。テレビで観た天気予報のように、週末の雨は朝になればやむだろう。

「ぜんぶ、なんでもなかったように、返してもらうんだから……」

そう祈りながら、あたしは朝を待つことにした。鈴木目は洗っても痛みを主張するらしく、彼の啜り泣きを聞きながらあたしは、果てのない時間をひたすら待ち続けた。

パソコンのそばに置かれた時計で秒を数えて、分を数えて、一時間一時間を数えて、ひらすら待つ。

そうしてようやく、地下の朝は目立つ境もなくやってきた。

外にはきつと、太陽が昇っている頃。あたしは部屋を出ることを決めた。地下で息を潜めてアリの壊滅を待っていても、誰も助けには来てくれないだろう。ここにいたって、なにもならないのだ。

外で、街で、人々は戦っているに違いない。あたしは武器を持っている。今度は逃げ出さずに、戦うんだ。

「よし、決めた……」

あたしは立ち上がると、ドアへと歩きだした。察してか、弛んだ蛇口のように泣いていた鈴木が、顔をあげる。

「上に行くのか？」

「そうだよ」

「……連れてってほしい」

目は閉じられたまま。どうやら見えないらしい。昨晚の威勢はどこえやら、実に素直だ。

訝しく思っ黙り込む。そんなあたしを腫れ物でもさわるように、鈴木は恐る恐る頭をさげた。

「頼むよ。ここにいることを誰も知らないんだ。復旧が遅れば、餓死してしまうかもしれない。目も見えないんだ」

そう言っ瞼を開く鈴木。彼の眼球は白く濁り、赤く充血し、黒目さえ判別できないくらいに淀んでいた。

この場所に来るのに、迷路のような廊下を歩いた。アリだっているかもしれない。まず脱出は不可能だろう。あたしは鈴木のを握っている。このまま捻り潰すのは、なんて簡単。

「わかった。そのかわり車の鍵を渡して。それに両手を縛る。逃げられないと思ってよ」

だけど殺してなんかやらない。

あたしは狂人でも人殺しでもない。鈴木とは違う。彼を警察に突きだして、あたしはそれを復讐にする。

「あんたなんか嫌いだけど」

鈴木から車の鍵をもらい、縛る。それから、鈴木を先頭にし、入った時よりも気を配りながら廊下への扉を開けさせた。

廊下の様子は殆ど変わりはない。

鈴木を支えるように進ませる。神経が張りつめてゆく。

ゆっくり、確実に。あたしは注意深く、けれど機敏に、前へ前

へ進む。ライトを照らす。アリはいない。進む。また照らす。周囲を見渡す。

薄暗いリノリウムの廊下を抜けて、コンクリートの階段をあがる。鈴木が階段から転げ落ちないように配慮し、そしてなるべく死体を見ないように、一段一段あがる。息を潜めて、目を凝らしながら。

廊下も慎重に進み、あたしたちはついに外への扉の前に立った。

「これを開ければ地上か。もしアリが出現したら、あんたに構わず逃げるからね」

鈴木に吐き捨てるように言うと、あたしは扉の脇へとにじりよった。唯一の武器である殺虫スプレーを構える。

「ドアノブを回して、少しずつ」

鈴木がドアノブに手をかける。

「開けて」

震える手でゆっくりと、扉は開かれた。

一瞬、目が眩んだ。柔らかな光が扉の間からするりと抜けて、あたしたちを照らす。

湿った地下の空気を切り裂くような一迅の風が吹いて、真っ青な世界に包まれる。

ため息が漏れた。

先ほどの雨とうって変わって、外は晴天だ。

温かな空気が光とともに溢れ、爽やかな青をたたえた空が優しく見下ろしている。

「アリはいないみたい」

あたしの声にホッとしたのか、鈴木が再び涙を流し始めた。

「今度はあたしが先に進むから、音がする方向についてきて」

僅かな水たまりを残すだけのアスファルトが広がっていて、アリがないのは明らか。そう確信して、歩きながら全身の力が抜けていくのが分かった。大地を踏みしめるごとに、体に溜まった悪い気持ちが暖かな太陽光に溶かされてゆく。

まぶしくて空を見上げると、平和の象徴のような鳩たちが悠々と旋回していた。

美しくて、なんて健全な日常だろう。

「あたしが運転するから、助手席に乗って」

車を目の前にして、自然と唇が綻んだ。やっと街に帰れるのだ。

街は悲惨な状態かもしれない。それでも単純に、嬉しい。

車のキーのボタンを押し、鍵を解除する。泣き出したい気持ちを抑えながら運転席に向かう。

帰るんだ。

が、足が止まった。

何かがあたしの背後に落ちるような音がして、あたしは停止した。あたしと鈴木のように真ん中に。空から唐突に、何かが降ってきたらしい音が。

振り向く。鈴木も何事かと頭を揺らしている。あたしはゆっくりと、落ちた何かに視点を切り替えた。

鈴木顔から胸へ、胸から腰へ、腰から膝へ、足下へ。

そして、何か。

見た。けれどあたしには、それが何なのか全く分からなかった。

「ミミズ……？」

無意識に出た疑問符で、その正体をなんとなく察知する。とは言っても落ちてきたそれは、本来のミミズとは明らかに一線をかいていた。

頭上を仰ぐ。

鳩が旋回している。

鳩たちが高度を落とす。

バランスを崩す。

落下。

ボト！

ボトボトボト！

あたしは悲鳴をあげながら鳩の落下を回避した。全ての鳩が落ちたのを確認して、地面を見渡す。

やはりミミズだ。鳩の体をミミズが覆っている。

高い空から落ちたのにも関わらず、鳩の体に絡む大量のミミズは、威勢良く蠢いている。

そしてあろうことか、鳩を喰っていた。

「な、なんなの……？」

あたしがたじろいたと同時に、今度はあたしではない誰かの悲鳴が上がった。

鈴木さんだ、と思う前に、あたしは走り出していた。

枝が折れるような音が響き、鈴木の中から何かが吹っ飛んだ。

ごろりとアスファルトに転がる何か。……ゴキブリだ。

人間の赤ん坊くらいの大きさのゴキブリ。それが、緑色の汁を噴出しながら節のある太い四肢を蠢かしている。

鈴木がゴキブリの上に倒れた。絶命していると分かるのに時間はまったく必要なかった。何故なら、鈴木の手首がL字に折れていたからだ。

ゴキブリの緑色の体液と、鈴木の手首の赤い血液がアスファルトの黒をじわじわと染めてゆく。

後ろを見るのをやめて体勢を建て直し、足をひたすら動かし、大地をけりあげる。

「いやあ、いやあ……」

あたしは有り得ない事態に困惑しながらも走った。見渡せる周囲は平和そのもので、辺りには何気ない静けさが広がっている。

いや。

よく耳をそばだてると、静閑な景色の向こうに奇妙な音があつた。

ジー、ジーという、独特な音。

聞き覚えがある。

「オケラの、鳴き声？」

声の正体を確認しようとして、あたしはやめた。

いつの間にか建物の裏から、黒い波がこちらに向かってきていた。

アリは建物な潜んでいた。

それだけではない。

アリ以外にも、恐るべき虫たちは存在していたのだ。

「一つ目の巨大イカ、海亀ほどの団子虫……」

車に飛び乗って車の鍵をポケットから探り出す。差し込む。回す。鈍い音をたててエンジンがかかる。ハンドブレーキをあげ、ギアを変え、あたしはアクセルを一気に踏み込んだ！

――動き出す。また動き出す。黒い悪夢と共に。

人類の想像のキャパシティーを越えて、彼らは大挙してきた。自らを封じた氷の世界から、遙かな水の世界へと旅立つ。

漆黒の、闇よりも黒い津波となって、すべての日常を飲み込む。人を食べ尽くす。

あたしは呆然と、眠れぬ日々が続くことを思い知った。

この黒い、

人喰らいの海辺で……。

――完――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6848j/>

人喰らいの海辺

2010年10月10日20時28分発行